

2016.09.23 於：衆議院第一議員会館 大会議室
NPO法人日本動物虐待防止協会（NIPPONSPCA）主催
動物愛護週間イベント「動物虐待のない世界へ」における講演

Animal Abuse Issues:動物虐待について

サンフランシスコ警察
巡査部長 シェリー・ヒックス

シェリー・ヒックス（ナガイ）と申します。サンフランシスコ警察の一員として私の経験を皆様にお話しできる機会を頂き感謝申し上げます。まず、私の個人的なことについて申し上げます。私の母は京都の出身で日本人ですので、日本人のハーフということになります。私はこのことは非常に重要であると思っています。なぜなら、私は日本の文化や特定の伝統について非常によく理解しているので、日本人の一般的な生活観、人生観についてもわかっているからです。今日、ここでは、私の国で私たちが動物、特にペットを扱う上で経験してきたことについて皆様にお話ししたいと思います。地球上の様々な動物に対して、国によってそれぞれ独自の異なる考え方を持っていると思いますが、私は、人間も動物のひとつの種として、他の動物と同じように進化し、動物たちは私たちの生活にとって非常に重要な部分を占め私たちの日々の存在そのものを助けてくれる重要な役割を担うものであることを学び受け入れています。ですので、私は日本の動物たちだけでなく、動物を守る手助けをしたいと思っている人々を可能な限り助けるために友人として手をさしのべたいと思います。これが、警察官として、また、猫、犬、小鳥などと共に育ってきた少女の一人として、私から皆様にお話しする趣旨でございます。

私が最初に習った日本語は「猫（neko）」でした。私はその事実を忘れていたのですが、私にとって非常に重要なことです。だいたい昔の記憶の一つですが、私たち家族が、前の家主からとても美しい真っ白な猫を預かることになったのです。彼女はうちの両親に、子供達のために猫を飼いませんかと持ちかけられたのでした。その時、私は三歳で、お母さんが「猫（neko）」と呼んでいたその白猫にすっかり惚れ込んでしまいました。私たちはその猫を「猫（neko）」と呼んでいました。彼女（neko）は私にとって最高の友達でした。私には三人の兄がいましたが、だれも私と遊んでくれなかったもので、白い猫と昼寝したりしていつも一緒に過ごしました。

両親は、その猫が私にとってどれほど大切なものとなっていたかをよく分かっていました。二年後、私たちはロサンゼルスからサンフランシスコに引っ越しをしましたが、沢山の荷物と一緒に二歳年を取った猫をバンに積み込んで移動することができないと、両親は、次の家

族に猫を預けることにしたのです。このことは、私の兄たちにとっては、大したことでは無かったようですが、私をひどく傷つけたことは間違い有りません。私は、サンフランシスコに着くまで車の中でずっと叫び、泣き続けました！上の兄が、私が走って家に戻り猫を抱いて連れてくるのを私の身体を無理矢理押さえて止めたことを覚えています。車が走り出して家がだんだん小さくなって、私は猫と完全に分かれなければならないことを知ったのです。

私は一番の友達を失いました。これは1960年代後半のことでしたので、みなさん、もう私の年齢が少しおわかりになったと思います。このお話をしたのは、私の両親はペットの猫をほんとはよく世話していたのですが、5歳の娘のために猫と一緒に連れて行くことができないことがそれほど重要なこととは思わなかったのです。両親は私と猫は堅い絆で結ばれていることを知っていたにも拘わらず、私にとってその猫との関係が、私の情緒的安定と幸せにとってどれほど重要かに気付いていなかったのです。彼らは残酷な人達だったのでしょうか？いいえ、そうではありません。1960年当時は、家庭のペットというものは、2016年の今の時代のように家族の一員とは捉えられていなかったのです。

アメリカにおけるペットを考えると、農場で働く犬を飼ったり、納屋で寝てネズミを捕まえるためだけのために猫を飼うといった動物の飼い方が、この45年間に非常に劇的な転換をすることになりました。今でも、警察犬や救助犬など生活のいろいろな場面で働く犬たちは居ますが、現在では、毎晩、トレーナーと一緒に家に帰ります。警察の犬舎に残されて、また翌朝仕事に就くということは有りません。これによって現場での仕事上の関係が改善されるだけで無く、さらに重要なことは、犬とトレーナー（扱い者）の絆が深まり、両者の愛と信頼が育つのです。こうした犬たちは、人命救助などの特別な仕事・目的のために選ばれた犬たちで、厳しく訓練され、よく働き、頭が良く心から飼い主やトレーナーを喜ばせたいと思っているのです。彼らは指示された仕事は何でもやりますが、それはハンドラー、トレーナーとの信頼と絆があるからに他なりません。こうした犬たちは人の命を救います。彼らは世界中あちこちの現場、事案で人間の役に立っているヒーロー達なのです。

私のように、両親ともあるいは一方の親が動物好きな家族に生まれ育つ子供は幸せです。お陰で、成長過程で、私はペットを飼うことが難しくありませんでした。私は沢山の猫や犬、小鳥を飼いたかったのですが、両親はどれかひとつしか飼うことを許して呉れませんでした。nekoのことを覚えていますか。私が余りにも泣いたので、サンフランシスコに着いてすぐ、両親は上の兄に、妹の私のために新しい子猫を見つけてくるようにと言いました。そこで、当時は、一般的でしたので、彼は新聞でペットの猫を探しました。（インターネットはない時代でしたから）

兄は、新聞で、引っ越すので猫を預けるところを探しているという若い女性を見つけました。その猫は老猫で、別の猫と喧嘩して怪我をしていました。兄と私は車でその猫を連れに行ったのですが、とても醜い猫でした。尻尾の毛はなく、肌がむき出しで噛みつかれた跡が

ありました。でも、私にとって、彼女が年を取っているとか、醜いということはどうでもよく、また猫が飼えること、そしてその猫も誰か愛してくれる人を必要としていることがすべてでした。彼女の名前は「Lucky」、私は彼女を愛しました。私は彼女が家の玄関前の庭の階段の下で眠るように死ぬまで15年間一緒に暮らしました。

私がこの話を皆様にするのは、「貴方は動物が生きる第二の機会を与えることができる」、ということが、非常に重要なことだからです。私が彼女 (lucky) を見たときには、醜くて、年老いていて、もはや可愛らしい子猫ではなかったために、多くの人がその猫を引き取らなかったのですが、この猫は何も悪いことをしていません。でも、彼女の傷は直ぐに癒え、毛並は尻尾に白い輪がある美しいグレーのコートになりました。彼女はとても頭がよく、私が愛し、世話をした私の猫でした。毎晩、私と一緒に寝ていましたし、学校から帰ってくると私を迎えてくれました。彼女は私が友達にいじめられたりしたときも常に私の友達であり話し相手でした。彼女はいつも私のそばに居ました。何があっても。

アメリカでは、シェルターに取り残されて誰もほしがらない大人の猫や犬よりは、子犬や子猫の方が良いという共通の問題をかかえています。(しかし) 実際のところ、どちらかといえば、成犬や成猫をもらう方がよりよい選択かも知れません。それは、それぞれ飼う人の固有の事情によって異なるのです。大人の猫はすでに人格をもっていますので、それを見なければなりません。より活動的な猫がほしいのか、それとも怠け者で貴方が本を読んでいる間、一日寝ているような猫がいいのか。犬の場合でも、既に紐をつけての歩き方を知っていて、家の外でトイレをする犬の方がいいかもしれません。彼らは、子犬工場の哀れな犠牲者たちです。実際にそうなので、私は彼らをそう呼びます。ひとつの産業。ビジネス。純粋で単純、そして残酷です。

子犬工場は、犬や猫を社会性を無視して、繁殖のために子犬を生まれ、あるいは金を得るための機械として繰り返し子供を産ませ、彼女の幸福や生命を無視してまるで使い捨てのように扱うことで知られています。こうしたかわいそうな繁殖用雌犬は、妊娠のサイクルごとに繰り返し妊娠させられてできるだけ多くの子供を産ませるために使われます。子犬を買う人たちは、決してこのような酷い、悲しい、ネグレクトされた状態の犬を見ることはありません。

その代わりに、彼ら子犬や子猫を買う人たちは、そうした母親達が次から次へと生んで、6週間にも満たない短い間に母親から引き離されてしまった可愛らしい小さな赤ん坊を見るだけなのです。善良なブリーダーは子犬が12週を過ぎなければ母親から離すことはしません。それにはいくつか理由がありますが、ひとつの重要な理由は、子犬たちは母親や兄弟達と一緒に過ごすことによって社会性を学ぶことができるからです。そのため、ペットショップで子犬を買った場合、健康上の問題や、将来、大きくなってから問題行動をおこすような犬を買ってしまうことも有り、大きな賭をするようなものです。時には、こうした問題行動は子犬が成長し、青年期に他の犬と接するまで分からないこともあります。攻撃性や恐怖は

犬同士の非社会性を引き起こし、そればかりか、特に、人との接触に関して問題が生じてしまうことが危惧されます。

しかし、こうしたペットショップはもはや、サンフランシスコには存在していないことを皆様に報告できるのは喜ばしいことです。彼ら（ペットショップ）が、ウィンドウに可愛い子犬たちを並べる背景に、いかに残酷な方法で子犬たちを生産しているかという事実を明るみに出してから、そうした店は、地域社会に受け入れられなくなりました。より多くの人がある事実を知れば、店で売っているような子犬や子猫を買う人はもっと少なくなるでしょう。

愛のない悲しく孤独な生活の背後には可愛さなどありません。また、こうした動物たちが他の暖かい血が流れる動物たちと同じ以上に切望しているのは愛情なのです。一生を小さな針金でできたケージで過ごし、子犬を産むことだけを強いられ繰り返し妊娠させられ、僅かなお金で子供達を引き離されていくのです。世話をしなければいけないほどお金が儲かる仕組みなのです。

アメリカにおける**闘鶏**の問題は、確かに、農村地帯に顕著な問題ではありますが、地方に限った問題ではありません。他の賭博場と同じように大勢の客を引き寄せますが、50州のうち、40州が違法としおり、重罪となります。つまり、闘鶏は重大犯罪であり、多くの場合、刑務所で時間を過ごすのと同じくらい、厳しい罰則・罰金を課せられる罪となります。闘鶏の罪で捕まった被告達は、「鶏は闘う性質をもっている」と言い訳するのは事実ですが、それは正確な例えとは言えません。

雄鳥は、実際の所、お互いに闘う性質を持っていますが、それは縄張りや餌を確保し、主張するための闘いです。また、雌鳥を取り合うための闘いもあり、その場合には時に相手を死に至らせることもあります。

しかし、ナイフやカミソリの刃を人為的に鶏の足に取り付け不自然な状態にして、興奮させ人の手で鶏を高く持ち上げて鶏たちをぶつけ合い蹴り合ったり切りつけ合わせたりさせることは、結果としてそこら中に血は飛び散り羽が抜け落ちるような死を招く激しい闘いとなるのです。こうしたことは、鶏の本来の性質を人が搾取し娯楽を提供していることに他ならず、また、強制的な暴力を加えることに無関心な人たちにあぶく銭を稼がせることにつながっているのです。

次ぎに**闘犬**についてお話ししたいと思います。悲しいことですが、闘犬はアメリカで依然として社会問題となっています。しかしそれが問題となったのはわずか20年ほど前からのことです。闘犬は、幸いなことに、全米50州すべてで違法とされており、重犯罪とされています。この罪の「悪辣さ」については、明らかに人に対する犯罪及び重度な暴力と同じ種類の犯罪と関連づけられています。闘鶏も闘犬も動物がより興奮して闘うようにステロイドを注射されているのが一般的です。それによって通常の動物の喧嘩に比べてより激しい闘い

を人為的に誘発し、観客を喜ばせている訳です。

ギャンブルのあるところには常にお金とごまかし・詐欺がつきまといまいます。ごまかしがあれば、窃盗や怒りが渦巻きます。怒りには暴力がつきものです。その根源にはお金があります。どちらの犬が闘いに勝つかにお金を賭けるわけです。勝った犬の子供を売ることでまたお金を稼ぎます。勝負に負けてお金をすってしまった人たちの怒りは、時に（犬の）死を招きます。負けた犬は闘犬の直後かあるいは（しばらくして）獣医の手当もないまま死んでいきます。また、負けた犬の持ち主は自分の犬が負けたことに怒り、その犬を直後に死なせてしまうこともあるのです。以前、有名なスポーツ選手が、犬を死なせた罪で有罪になった事案がありました。それは、彼の犬が優しすぎる性格で、仲間の犬を攻撃して命を奪うような殺人者としての本能を持ち合わせていなかっただけなのですが、犬を、ただ他の犬と闘わせることを目的にピットに入れ、それを楽しむような人は純粋にサディスト的な人なのです。

特にこのようなかたちで犬たちを闘わせるという考え方は、私たちのように犬を知りその性質を愛する者からすると、ほんとうに忌まわしく嫌悪を感じます。犬たちは人によって育てられ、私たちが日々生きていくことを助けるようにつくられているのです。私たちは犬たちを一定の大きさ、体重にまで育て食料のために狩りをさせたり、家畜を集める手伝いをさせたり、重い荷物を引っ張る手伝いをさせたり、狭いトンネルにも入り込んでネズミやその他の害獣を追いかけさせたりします。また、私たち人間は犬が人に仕えるよう育て、また、私たちを守りその命を助けるように育てているのです。犬たちは世界中で人間の命を救ってきたにも拘わらず、人間の中には、人間の娯楽のために、彼らの人に対する愛や献身を裏切り続けて、犬がお互いを殺し合うように命令している人たちが居るのです。彼らは、私たち人間を喜ばせたい一心でお互いが闘い殺し合っているのです。

しっかりと社交性が身につけていない犬たちは、時に、攻撃的になりますが、彼らのそれぞれの性格が許す限り、うまくやっていくことを学べるようにするのは私たち人間の仕事であり責任です。幸せな犬は走るのが大好きで他の犬たちと一緒に遊びます。責任有るブリーダー（繁殖家）たちは、安全なレベルの脅威だとして、決して劣った気質をもつ犬や過度に攻撃的な性格な犬を育てることはありません。

米国FBI（連邦捜査局）は、2014年から、彼ら独自の特殊なカテゴリーで動物虐待事件に関するデータを集めています。その理由は沢山ありますが、主な理由の一つは、動物への虐待は多くの場合、家庭内暴力や子供の虐待、また、その他の一般的な人に対する暴力犯罪の初期の兆候と関係があるからです。人は、簡単に動物を傷つけることから始まり、すぐに人間を傷つけることへと進んでしまうのです。多く場合、私たちの社会では高齢者や子供達が最も傷つけられ易い危うい存在なのです。

動物を傷つけ、人に対する影響力を得るために、家庭のペットの命を脅かす暴力的な攻撃

をする人たちと、人と一切共感することなく、普通の人間の感情を欠いていて、暴力が満足感をもたらすからという理由で、動物を虐待したり殺したりする人たちとは正の相関があります。私たちの社会では、こうした人たちは、危険な人物です。人を傷つけたいと思う人は最初に、罪のない、そして声を上げない動物たちを傷つけることから始めるのです。

どんなものであれ、動物を闘わせることは禁止されるべきで有り、違法とされるべきなのです。このような行為はもはや、単純な暴力にも規則が必要だった光の差さない時代の過去の遺物としましょう。こうした行為を支持する人々もまた、たとえ暴力を助長するような要求をすることで問題の一端を担うような小さな犯罪行為であったとしても責任を取らなければなりません。こうした残酷な行動は、公衆の前で娯楽や動物の性格だからとして見せびらかすようなことをしてはいけません。事実、それは娯楽や動物の性質などではないからです。犬たちは好きで自らの意思でこの残酷な闘いを演じている訳ではありません。彼らはただ、人間の保護者からの愛を得たいために最善を尽くしているだけなのです。

翻訳：池田こみち (Komichi IKEDA) 2016.08.29